

# 臨床獣医師から見た

# 養鶏業界 37

株式会社ピーピーキューシー研究所 加藤 宏光

## オランダ・卵の競争力

著者は前号（二月号）で書いたようなトラブルを経て、ブレーメンの北約二〇〇kmのローマン社のあるクックスハーフェンにたどり着きました。そこで紹介されたローマン鶏の能力などは、すでに過去のもので、改めてここに特筆するほどの情報ではないので割愛することにします。

当時、鳥インフルエンザは問題視されていませんでしたし、さほどバイオセキュリティーが厳しくなかったため、種鶏場を巡回し、それぞれの設備の内部を案内してもらいました。

その道中で、ドイツ（当時西ドイツ、以降ことわりがない限りドイツと表現します）における採卵鶏の羽数が七、〇〇〇万羽であるという情報を得ました。

ドイツの人口は約七、〇〇〇万人で、先進国のどこであっても人口分の採卵鶏を飼育していれば、卵は基本的に自給率一〇〇%のはずです。

### 《コラム1》

#### 【派遣切り】

昨年来、派遣切りについて、いろいろな解説がなされています。その中で、著者が興味をもったものを挙げてみます（田勢康弘の週間ニュース新書）。

#### 【雇用のミスマッチについて】

元派遣が吹き出しに集まる。彼らに本当に仕事がないのか？ 介護職員人数は極度に不足している。この職場に就いている日系ブラジル人は「介護される人々は優しく、親切で、待遇も悪くない。どうして、職のない人々が介護職に就かないのか……」と不審げに語る。

元派遣人はこうした職を求めない。派遣切りされた人は農業や介護職に就こうとはしない。元派遣の人は言う。「経験のない仕事はできない」と。違う世界に、未経験な仕事にたじろぐ人が多い中で、旅役者一座（沢竜二さん）が元派遣社員（井本正さん、失業後離婚）を救おうとする。この一座でいきなり照明を任せられ、新しい仕事に井本さんは戸惑う。ルポは会津若松で開演する一座に密着し、井本さんの変化を追う。慣れない仕事をこなす彼に、息子からのメール。

「帰ったら一緒に飲もう」。

井本さんは一人でない自分を感じ、新たな門出を誓う。田勢は語る。「本人の自覚で立ち直る方法が見つかるのではないか……」。

～以上、引用より～

著者は、何人かの生産者と派遣問題を語り合いました。彼らが異口同音に主張するのは、「派遣社員は、社会をなめている」というものでした。その心の内には、自分の会社へ有能な人材を招き入れようとしても、「3K、5Kを嫌う今の日本人労働者は、人生をかけて飛び込んでこない」というジレンマに長く悩まされてきたことによるのでしょう。

外国人研修生制度が普及し、候補者を自分の目で確認して採用した場合、「概して日本人より感性豊かに仕事に取り組む」という話をよく耳にします。それは、上の引用にある、「介護される人々は優しく、親切で、待遇も悪くない。どうして、職のない人々が介護職に就かないのか……」と不審げに語った日系ブラジル人の言葉にしみじみと表れています。これからの、暗い一本道をいかに歩き切り抜けるのか!?

それは真剣に取り組んできた昭和20～30年代に社会を担ってきた世代にとって当たり前な心構えを、現代の20～40歳世代に改めて社会が問いかけるのでしょうか。そして、彼らはその問いかけに真剣に答えようとするのでしょうか……？

一方、先日までいたオランダで仕入れた情報によれば、オランダ産の卵はその六〇%がドイツへ輸出されている」とのことでした（二、七〇〇万人の人口に対して採卵鶏飼育羽数は七、〇〇〇万羽）。よく考えてみれば、これは大きな矛盾です。そこで、案内役をかってくれたシュミツケル氏（当時、国際営業部長）に疑問を投げかけました。

「七、〇〇〇万羽の採卵鶏を国内で飼育しているなら、自給率は一〇〇%でしょうか？ それなのに、オランダから卵を輸入していると聞きました、それは本当でしょうか？」  
彼は何ともいえない笑顔で答えました。

「確かに（ドイツの）自給率は一〇〇%です。そして、オランダから卵を輸入しているというのも本当です」。著者は「それでは、卵は余りますね？」と重ねて尋ねました。  
「そうです。余ります」との当然ともいえる返事。「では、余った分はどうするのですか？」と訊くと、彼は次のように答えました。

「イスラエルなど中近東の国へ、

輸出するのです」。

いかにも、変なストーリーです。自国の生産で間に合う卵をわざわざオランダから輸入し、その結果余った卵を中近東へ輸出するというのですから……。

そこで「なぜ、オランダから輸入しなければならぬのでしょうか？」と尋ねました。その答は、著者の想定をはるかに超えていました。

「ドイツから輸出できる製品は、自動車をはじめ付加価値の大きいものがたくさんあります。しかし、オランダにはあまりないのです。卵くらいは輸入しなければなりません」。さて、このやりとり似た逸話があります。何年か後に、当時若かった二名の鶏卵生産者とともに、オランダにあるヘンドリッククス社（現在B400というラインを供給しています）へ、ハイセックスという鶏種について調査に行ったときのことです。

夜遅くホテルに着いたわれわれを出迎えてくれた営業のスタッフ、カイパー氏とホテルのレストランで食事していると、遠くに汽笛の音が

聞こえました。

カイパー氏は指で差しながら、「あそこに長い列車が見えますよね。あれは、1km以上繋がっているのですよ！」と言います。著者はアメリカの貨物列車が一マイル（約1.6km）以上繋がって走るのが見たことがありません。貨物列車が長く繋がっていったところで、自慢にもならないだろうに」と思いながら、生返事を返しましたが、カイパー氏はそのまま続けます。「あれは全部チーズなんです。フランスへ輸出するのです！」。これには、驚きました。連れへの通訳もそこそこに、「全部チーズ!？」と聞き返しました。彼の話しがかったことは、次のことでした。

「オランダはね、あれだけのチーズを輸出して、あの一〇分の一量のチーズをフランスから輸入しているのです。そして、輸入するチーズの価格は、あの列車いっぱいのチーズより高いのです……」。

国際競争とは、種々の要因が複雑に重なり合っていることを知らねばなりません。

二〇〇九年、年明け早々の低卵価

にしびれをきらしている生産者が大勢いらつしやることをよく知っています。しかし、昨日、若いスタッフが巡回した際、関東の小規模生産者が次のように語っていたそうです。  
「卵価？ そんなのここ何年も似たことないなあ！ 値段は自分でつけるものだから……」。

そうです。彼の生産物は七〇%近く直販でさばけるのです。

競争力をつける方法は一つではないことを、実感させられる話でした。それでは、国際競争力の余話を終わりにして、国際競争に採まれたブロイラー業界について話を進めていきましょう。

## ブロイラー産業の苦悩

円高になったわが国で、最も注目しなければならぬテーマは人件費の高騰です。それも国内生産・国内消費の製品であれば、まだある意味余裕がありますが、グローバルなコスト競争にさらされている製品ではいかにも深刻です。

表1 1985年当時のブロイラー生産指標（生鳥）

要求率	1.75		
育成率	96.5%		
生体重	1.4(1)	1.8(2)	2.8(3) kg
PS	271.7		

(加重平均体重=2.29g、加重出荷年齢=46.48日)

$$PS = (\text{体重} \times \text{生存率}) / (\text{日齢} \times \text{要求率}) \times 100$$

例  $2.29 \times 96.5 / (46.48 \times 1.75) = 271.7$

(通常はPS=235程度で採算分岐点、現在280~290が多いという)

昨年のリーマン・ショック以来、自動車産業、家電産業をはじめ、鉄産産業などあらゆる産業で派遣切り問題が深刻化しています。これらは、ほとんどが長期保存のできる製品です。

マスコミ情報によれば、薄型テレビは昨年の北京オリンピックでの需要を期待して生産したものの、期待ほどの需要が望めなかったため不良在庫が大きな問題となっているそ

うです。

また、その生産調整が必要になっているため、自動車業界では、秋以降の景気低迷で買い控えが著しく、昨年来二〇〜三〇%に及ぶ需要減で多数の在庫があり、これを処理するために生産調整を急がねばならないと告げています。

生産調整のために余剰人員を整理することの側面に、国際的に高くなった日本国内の人件費は大きく企業を圧迫しています。

パブル景気に浮かれはじめた二、三、四年前に、ブロイラー産業の寡占化が顕著になりはじめました。そもそもブロイラー産業が急成長したのは、前にも触れたように四〇年ほど前のことです。

それまでの廃鶏肉主体の鶏肉産産から、肉専用種による効率的な肥育技術を取り入れて急速に育ったブロイラー産業は、この頃よりブラジル、アメリカあるいはタイなどの国々からの輸入肉と競合せねばならなくなってきました。

ケンタッキー・フライド・チキンのチェーン店展開が若年層の嗜好に

マッチして爆発的に市場を広げ、この規格に応じたブロイラー肥育市場が開拓されたことも競合に拍車をかけました。ちなみに、一九八五年当時の一般的なブロイラー生産農家の指標を挙げてみます(表1)。当時では、この指標に準じた成績の生産農家が、多く、PC1190以上のケースはあまり目にしませんでした。

インテグレーションは大規模なものと中小規模のローカルインテがまだ競り合っている上に「食鳥検査制度が取り入れられる」という情報で、今後のブロイラー処理のシステムがどのように変遷するか、戦々恐々の時代背景です。それに、メキシコやアメリカ製の低コストの製品が輸入されて、国内生産を圧迫しはじめたのです。

次号では、当時のブロイラー生産現場の悩みを振り返ってみたいと思います。



つづく